

沼津市若山牧水記念館

第56号 平成28年3月1日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



よりあひて真直ぐにたてる青竹の やぶのふかみにうぐひすの啼く 牧水

牧水は、大正七年には東京巢鴨に住んでいた。元日の除夜の鐘の鳴っているうちに目を覚まし、午前二時には原稿用紙を用意した。しかし、結局それを片付けて酒の用意をして、青森から上京し、泊まっていた加藤東籬を起こして共に飲みはじめた。五時になつて雑煮を食べ、神奈川県三崎に案内しようと家を出たが、三崎行きの汽船は休航で、汽車で行くことにし、途中下車して鎌倉へ。鎌倉を案内しているうちに、ふと、伊豆の土肥温泉に行こうと思いつき、沼津の狩野川河口の宿に一泊し、翌日の汽船で土肥に渡り、明治館に二泊した。

二月七日に再び一人で土肥温泉に向かい、二十四日まで明治館に滞在した。掲示の「よりあひて」の歌は、このとき詠んだ作品である。静かな土肥温泉の自然に触れて、牧水の自然観が昇華して行くきっかけと私は位置づけている。大正六年までの何処か重苦しいような作風から立ち直ってきた牧水の第二期とも言われる時期の歌で、第十二歌集

の『溪谷集』に載る。『溪谷集』は「秋の曇冬の晴」「秩父の秋」「上総の海」「伊豆の春」の四章から成り、菊半截百二十四頁の小さな歌集だが、牧水の歌集群の中では大事な歌集だと思つてもいい。「よりあひて」と共に土肥温泉で詠んだ作品を紹介する。

ひそまりて久しく見ればとほ山のひなたの冬木風さわぐらし
かすみあふ四方のひかりの春の日にはるけき崎に浪の寄る見ゆ

『溪谷集』の次の歌集『くろ土』によると、大正七年は五月から六月にかけて旅をし、浜松にて「比叡山にて」「奈良にて」「熊野にて」「那智にて」の一連の歌を詠んでいる。七月には、『溪谷集』より前に出版される予定であった歌集『さびしき樹木』と随筆集『海より山より』を発行し、十一月には上州への旅に出て、『くろ土』所収の「みなかみへ」の作品を残している。この一年は旅から旅であった。この旅は、紀行文、随筆などの寄稿による収入を図るためでもあったと思われ、『創作』十月号には、短冊一枚二円、色紙一枚三円などと広告を出している。

私は、『くろ土』に載る大正八年、九年の自然観照の歌が、歌集『山桜の歌』所収の大正十一年の「山ざくら」の歌に繋がると思っている。
なお、牧水は大正九年八月に静養のため沼津に移住し、その後、沼津に永住した。
(須永秀生)

啼く聲のやがてはわれの声かとも

— 牧水と比叡山・本覚院 —

吉川宏志

若山牧水は大正七年の五月、比叡山に登った。山上の宿院で雑誌「創作」の選歌をするつもりだった。しかしその老女から、一泊以上滞在することを断られてしまう。困っていたところ、たまたま出会った人に、古い山寺を紹介してもらったのだった。そこならしばらく泊まってもいいという。

山寺には伊藤孝太郎という老翁が留守番役をしていた。孝太郎は元は西陣の職人であったが、無類の酒好きで妻を苦しめ、妻と娘が亡くなったあとは、飲んだくれの生活をしてきたという。各地を放浪し、今はこの寺で使われている。耳はかなり不自由になっていたようだ。

牧水は、この不幸な老人といつしか親しくなり、五日間ほど、毎晩酒を飲んでいたという。このとき牧水は数え年で三十四歳であった。年も違い、境遇もまったく違う二人が、寂しい山寺で、しみじみと向き合い酒を飲んでいる場面を思い浮かべてみる。哀しいけれども、どこかユーモアがある。

孤独のなかに柔らかな微笑みが寄り添っている。それが牧水の文学の大きな特徴だと私は思うが、比叡山のエピソードにも、鮮やかに現れている。

このときの様子は『比叡と熊野』という随筆集に詳しく書かれている。寺のまわりで鳴くさまざまな鳥の声を響かせながら、孝太郎という老いた男の姿をいきいきと描いている。彼は貧しく、普段は酒をかうにも難儀をしていた。牧水からふるまわれた酒を飲みつつ、

どうせ私も既う長い事は無いし、いつか一度思ふ存分飲んで見度いと思つてゐたが、矢つ張り阿彌陀様のお蔭かして今日旦那に逢つて斯んな難有あやういことは無い、毎朝私は御燈明を上げながら、決して長生きをしようとは思はない、いつ死んでもいいが、唯だどうかぼつくりと死なして下されとそればかり祈つてゐたのであるが、この分ではもう今夜死んでも憾あやうみは無い、などと言ひながら眼には涙を浮

べて居る。
と感激するのである。痛ましく、悲しい酒である。

私は京都に住んでいるが、牧水が泊まったという山寺を訪ねたことはなかった。一度見てみたいと思い、今年の正月の三日に、比叡山に登ることにした。以前は子どもを連れてよく登っていたのだが、仕事が忙しいせいもあって、この数年は山から遠ざかっていた。



私の住んでいるのは比叡山のふもとで、修学院駅という小さな駅に近い。東に向かつてしばらく歩くと、きらら坂という山道に出る。そこをずっと登っていくと、延暦寺まで行けるのである。山に刻まれた細い谷の間を縫い、急な坂がずっと続く。日頃の運動不足がたたって、ずいぶん辛かった。冬なのに暖かな日で、汗がたらたらと首筋から落ちる。二時間ほどゆつくりと登って、ようやく延暦寺の西塔と呼ばれる区域にたどり着く。

牧水は『比叡と熊野』で、

この××院といふのは比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺のうち、最も奥に在つて、また最も廢れた寺であつた。

と書いている。なぜ牧水が伏せ字にしたのかは不明であるが、当時の書簡などから、本覚院という寺であることは分かっている。大悟法利雄の『若山牧水伝』にも、西塔の本覚院であることは明記されている。孝太郎が詮索されることを恐れて、牧水は寺の名前を書かなかったのであろうか。

本覚院については、武覚超むけつからう『比叡山諸堂史の研究』(平成二〇年 法蔵館)という本で調べることができた。ただ、あまり詳しいこと



は分からない。

上古には妙法院と号し、良源初登山後の住坊と伝えてゐる。鎌倉期の慈恵大師木像(重文)を本尊とし、現在は天台宗教学規程第九条の二に定める公募による僧侶養成の修練道場として「叡山学寮」が置かれてゐる。(傍線は筆者)

とあるのみである。良源は九一二年の生まれで、十二歳で比叡山に上り、仏門に入ったと言われている。火災によって荒廃していた延暦寺を復興させた「中興の祖」として知られる人物である。余談であるが「おみくじ」の創始者が、良源であるという説もあるそうだ。慈恵大師とは、良源が死後に朝廷からおくら

れた諡号。牧水が寝泊まりしていた近くに、鎌倉期の慈恵大師の木像は置かれていたのだろうか。一三七九年以前に成立した『叡岳要記』に、「妙法院」という名が出てくるようで、非常に古い寺であることは確かだが、現在の堂宇がいつ建てられたのかはよく分からないようである。

牧水の『比叡と熊野』に戻る。

滋賀県の坂本から登ってきた彼は、山上の宿院で一泊する。おそらく現在の延暦寺会館あたりだろう(ここには今でも一般の人が宿泊できる)。そこを追い払われた彼は、一五キロほど離れた浄土院(最澄の御廟所)まで歩いていこうとしていた。道ばたに茶店があり、その人のいい酒飲みの老爺(前述の孝太郎とは別人)と話しているうちに、本覚院を教えてもらったのだった。泊まれるかどうか、娘に問い合わせをさせるので、しばらく待っていてほしいと老爺は言う。

牧水は、

雀一羽降りてるぬ、静かな浄土院の庭には泉水に水が吹き上げて、その側に石楠木しゅんぼくが美しく咲いてゐた。

と書いているが、私が見ている冬の浄土院も

ひっそりとしていて、白砂に波紋のような輪がくつきりと描かれているのが印象的であった。その後、牧水は比叡の頂上に登って時間つぶしをして、茶店に戻っていった。霧や雲が立ちこめ、しばしば青空が見える、という天気だったようだ。

話がまとまり、牧水は茶店の老爺に連れられ、本覚院に向かった。もう夕暮れに近いころだったろう。

やがてその爺さんに案内せられて私は溪の方へ降りて行つた。今までの処より杉はいよいよ古く、径は段々細くなつた。そして、なかなか遠い。随分遠いのだなといふと、なアに今の茶店から七町しか無いといふ。近所に他にお寺でもあるのかと聞くと、釈迦堂が一番近いが其処には人がゐないのだから先づ一軒だちの様なものだといふ。

この文章を読むと、深山幽谷にある寺に連れていかれたような印象を受ける。しかし、茶店から七町(八〇〇メートル弱)くらいで、そんなに遠いわけではない。現在の道と、牧水のころの道とは、広さが違っているのかもしれないが、今歩いてみると、それほど細い感じもしない。比叡山によくある山道と、



比叡山延暦寺 釈迦堂 (比叡山延暦寺 提供)

そう変わりはないのである。

釈迦堂は、重要文化財になっている大きな御堂で、ゆつたりと広がった屋根が美しい。その正面右手に細い道があり、五分ほど歩くと本覚院に着くのである。

釈迦堂の近くには牧水の歌碑が立っており、
比叡山ひえやまの古りぬる寺の木がくれの庭かひらの寛かひら
を聞きつつ眠る



という一首が刻まれている。

この歌碑は、本覚院へ行く道とは違う道に建てられており、歌碑のまわりで本覚院を探しても見つからなくて、戸惑ってしまう。私もうろろすることになって、大変焦った。一度、釈迦堂のほうに戻ると、「叡山学寮」という立札がある。先にも書いたように、本覚院は今では「叡山学寮」として使われているのだった。その道を歩いていくと、ほどなく小さな寺が見えてくる。

牧水が山奥の寺のように書いたのは、少し脚色があるのではないか。もちろん、夜になれば、ここは非常に深い闇の中になるのは確かだろう。ただ、牧水が初めに泊まった宿院から、本覚院はそう遠く離れているわけではない。二キロ弱ほどの平坦な山道でつながれている。



本 覚 院 (筆者 提供)

らしい。しかし、今は誰もいないように、ひどく荒れている。草履などが、外にある靴箱の中に無雑作に突っ込まれている。ガラスの向こうに質素な部屋が見えるのだが、人の気配はまったくない。

「F」の下の横線が正面玄関のある建物で、そこから渡り廊下が伸びて、奥にある離れにつながっている。「F」の上の横線にあたる部分である。ただ、渡り廊下も途中で崩れており、スリッパの片方だけが投げ出されている。無

断で入るのは良くないのだが、建物の裏側に回ってみる。「F」の上方にあたるころは深い谷になっており、さまざまな草木が生い茂っている。離れの中をのぞきこむと、古びた畳が敷かれている。この寺に泊まる客はここに寝ていたような感じがする。

離れと玄関のある建物の間には、小さな坪庭がある。牧水の歌に「庭の筧を聞きつつ眠る」とあったが、筧はここにあつたのだろうか。しかし、枯れ草が群がっていて、それはどこにあるのか分からなかった。無惨に朽ち果てているが、大きな庭石や手水鉢などがあちこちに置かれていて、かつての庭の面影はかすかに残っていた。

なるほど四方を深い木立に距てられた一軒だちの寺であつた。外見は如何にも壮大な堂宇だが、中に入つて見ると、その荒れてゐるのが著しく眼に付く。この部屋を兎に角掃除しておいたから、と言はれて或る部屋に入つて行くと畳はじめじめと足に触れて、真中の囲炉裡には火が山の様に熾つて居た。

牧水は「外見は如何にも壮大な堂宇」と書いていたけれども、私は小じんまりとした印象を受けた。建物の配置は、上から見るとアルファベットの「F」のようになっていて、縦線にあたる部分が、寮として使われている



本 覚 院 中 庭 (筆者 提供)

たうとう雨は本降りとなつた。あまりの音のすさまじさに縁側に出て見ると、庭さきから直ぐ立ち並んだ深い杉の木立の中へさんさんと降り注ぐ雨脚は一带にただ見渡されて、木立から木立の梢にかけて濛々と水煙が立ち靡いてゐる。

このように牧水は書いているのだが、離れには坪庭に向かつて縁側があり、そこに立てば、周囲の深い杉木立を見渡すことができる。建物が当時から建て替えられている可能性もあるのだが、牧水はこの縁側に立っていたのかもしれない。私は、カメラのシャッターを切った。

ただ、牧水の文章には不思議に思われるところもある。

私は杉の木立と木立との間に遙かに光るものを見出した。麓の琵琶湖である。何処から何処までとその周囲も解らないが、兎に角おぼろおぼろ朧々とその水面の一部が輝いてゐるのである。

しかし、本覚院から琵琶湖まで、直線距離で七キロ近くもあり、襜のような山並みがつつと続いているのである。五月であれば、木々の新緑も茂っていたことだろう。琵琶湖が見えるポイントがあったのだろうか。地図で調べてみると、不可能ではなさそうだが……。

牧水は、妻の若山喜志子宛ての書簡にも、

僕の居る部屋からは老杉の間をすかして居ながら琵琶湖の一部を見ることが出来る
(五月二〇日)

と書いているので、虚構ではないのだろう。

当時はまだ高く伸びていない木もあつたはずだから、ちょうど隙間を通して琵琶湖が見えたのかもしれない。ただ残念ながら、私は琵琶湖を見つけることができなかった。

牧水は、本覚院に聞こえてくるさまざまな鳥の鳴き声のことを書き記している。カッコウ、ホトトギス、筒鳥、そして名前を知らぬ鳥の声に、牧水はひたすら耳を傾けている。歌集『くろ土』には、「比叡山にて」という章があり、鳥を詠んだ歌がいくつも収められている。数首を引いておきたい。

をちこちに啼きな移りゆく筒鳥つづどりのさびしき
聲は谷にまよへり

啼く聲のやがてはわれの聲かともおもは
るる聲に筒鳥は啼く

うちならび晝ひるのひかりに立つ杉の銚ほすぎ杉が
くりほととぎす啼く

ありし日の若かりしわが心にもしばしは
かへれほととぎす啼く

筒鳥はポポ、ポポと、筒を打つような声で鳴くそうであるが、牧水はそれを「さびしき聲」と捉えた。そして二首目のように、「われの聲かとも」思われたと表現している。牧水は鳥と一体化し、生きる寂しさを歌っていた

のである。

それにしても二首目は、「聲」を三回繰り返して、「啼く」を二回繰り返すという破格の表現である。短歌で繰り返し表現を用いると、音数が限られているので、それだけ言葉の種類が少なくなる。つまり、シンプルになつていくわけである。歌の言葉は非常に単純であるが、深い思いがにじみ出している。こうした簡明で奥行きのある歌を、牧水は『くろ土』で生み出そうとしていた。

三首目は杉の中に隠れて鳴いているホトトギスを歌っている。杉の立ち並ぶ比叡の山の雰囲気がよく伝わってくる歌だ。

四首目は、もう若くはない自己を意識した歌である。しかし、過ぎ去った若い心に「しばしはかへれ」と歌っている。ホトトギスの



声は、遠い日の激しい恋心などを呼び戻すものだったのだろうか。

鳥の声は、牧水の心を映し出し、揺り動かしてゆく存在であった。

同じ一連で、本覚院の生活は次のように歌われている。

覚かげより水をひきつつ火焚きつつみづから
わかす風呂のたのしさ

板の間のひろき真なかに据ゑられしひと
つの膳たねに行きて坐るかも

虎杖いんげりのわかきをひと夜鹽よしほに漬けてあくる
朝食あさけふ熱き飯いひにそへ

酒買さかひに爺おやをやりおき裏山うらやまに山椒さんしょうつみを
れば独活うどを見つけたり

自分で風呂を沸かし、山の野草を取ってきて食べるといふ、自給自足に近い生活のおもしろさが歌われている。質素な暮らしだが、自分の手を使って生きている喜びが、弾むように伝わってくる。四首目は特にユーモラスで、山椒を摘んでいたら、独活まで見つかったという心躍りが、軽快なリズムで歌われているのである。

「その寺男、われにまされる酒ずきにて家をも妻をも酒のために失ひしとぞ」という詞書をつけて、本覚院の老翁を、牧水はこう歌

っている。

言葉さへ咽喉のどにつかへてよういはぬこの
酒ずきを酔よはせざらめや

酒に代ふるいのちもなしと泣き笑ふこの
ゑひどれを酔よはせざらめや

「酔よはせざらめや」は「酔よわさないでいられようか、いや酔よわせよう」という意味。牧水自身も、酒によつて身を滅ぼす寸前まで突き進んだことがある。若き日に園田小夜子に失恋したときは、

なほ耐ふるわれの身體からだをつらくみ骨も
とけよと酒をむさぼる 『路上』

と、酒によつて自分の身を破壊しようと思つたのだった。酒のために家族も財産も失つた老翁は、もしかしたら自分もこんな人生を送つたかもしれないと思わせるような存在であった。

「言葉さへ咽喉のどにつかへてよういはぬ」という表現が哀しい。牧水には、自らを表現するための〈言葉〉があるが、この老人は言いたいことも言えずに生きてきたのである。ほとんど話さず、静かな酒であっただろうが、老人の悲しみを、牧水はしっかりと受け止めていた。他者の沈黙をじっと〈聴く〉ことが

できるところに、牧水という人間の大きな魅力がある。

牧水は老翁が酒を飲むのを止めたりはしない。もしかしたら死ぬかもしれないが、好きだけ飲ませてやろうとする。生きるとは、なるようにしかならないものなのだ。牧水の人生観がここに現れている気がする。夜の山からは、フクロウの声が聞こえていたかもしれない。

しかし、そうして暮らしているうちに、困ったことが出てきた。久しぶりに酒を飲んだ老翁は、今まで忘れていた酒の味を思い出してしまつたのだ。今は牧水がいるから、酒を買ってもらえる。また、瓶詰の肉類などもおつまみとして食べさせてもらつていた。しかし彼がいなくなつたら、もう酒が飲めない。本覚院では現金の報酬をほとんどもらつていなかったらしい。しかし、別の寺に働きに行けば、お金をもらえると。そこで老翁は、本覚院を出て、別の寺に行くことを決心したらしい。

牧水は、本覚院の住職が困るのではないかと心配するのだが、老翁は今までケチなことをしてきた住職が悪いのだ、と言ひ出し、忠告を聞かない。今まで抑制されてきた老翁の欲心を、牧水の贅沢が、再び掻き立てること

になつてしまつたわけである。

牧水に会わず、酒を飲まないままに死んでいくほうが幸せだったのか。それとも好きな酒を飲みながら死ぬほうが良いのか。牧水の心に、この老翁は不思議な影を残していったに違いない。

最後の夜は、茶店の老人も呼び、三人で宴会をすることとなつた。食べ物や酒を、山の麓でたくさん買ってきて、囲炉裏をかこんで飲み始めたという。

矢張り爺さん達の方が先に酔つて、私は空しく二人の酔ひぶりを見て居る様な事になつた。そして、口も利けなくなつた、^{ふたり}兩個の爺さんがよれつもつれつして酔つてゐるのを見て、楽しいとも悲しいとも知れぬ感じが身に湧いて、私はたびたび涙を飲み込んだ。

とても分かるのだが、なぜそう思うのか、言葉にはうまく表せない感情である。人間の弱さや脆さ、しかしそれを酒に溶かし込みながら生きていくしかないことを、二人の老人を見ながら、牧水は嘖みしめていたのであろう。人間は悲しくも可笑しいもので、自分もその一人にすぎないのである。

ただ牧水は、四十四歳で亡くなつてゐる

ら、あと十年の余命しか持つていなかった。酒飲みの老人たちと同じような老いを迎えられなかったことが、現在の眼で読んでいると、ひどく哀切に感じられる。

翌日、早朝から転居をする筈の孝太郎は私に別れかねてせめて麓までと八瀬村まで送つて来た。其処で尚ほ別れかね、たうとう京都まで送つて来た。

京都での別れは一層つらかつた。

私も、八瀬へと降りる道を歩いてみた。本覚院から、黒谷青龍寺を通つて、京都の北にある八瀬へ降りる山道があるのである。急なところもあるが、ほぼ一本道なので、わりあい歩きやすい。だいたい二・五キロくらいだろうか。ただ、老翁の孝太郎にとつては、かなり大変な道であつたらう。しかも、牧水と別れた後は、再び登つて寺に帰らなければならぬのだから。

八瀬からは、今ではバスが出ていて、京都の中心までは一時間足らずで行くことができる。だが、牧水はここから長い道のりを歩いていったのだらう。昔の人々はまことに健脚だった。半日の山歩きで、くたくたになつた足で山道を下りながら、私はそう思った。

私が八瀬の集落に降りてきたのは、午後五

時過ぎで、かなり暗くなつて来た。十分後にやつてきた京都バスに乗り込む。「神子ヶ淵」「九頭龍弁天前」といった、何かいわくありげな名前のバス停が、つきつきに過ぎていく。車窓の外は、もう深い冬の闇となつてゐる。牧水と別れた後、伊藤孝太郎という名の老人がどうなつたのか、今ではもう調べようもないだらう。百年ほどの時間の中で、人間の存在はあつという間に埋もれていき、名前だけが、かすかに残つていく。それは闇の中に浮かぶ小さな灯りのようだった。

「筆者プロフィール」 よしかわ ひろし



昭和四十四年、宮崎県東郷町生れ。同六十二年、「京大短歌」に参加。「塔」入会。現在、主宰。平成六年「妊娠・出産をめぐる人間関係の変容」男性歌人を中心に「第二回現代短歌評論賞、同八年「青蟬」で第四十回現代歌人協会賞、同十三年「夜光」で第九回ながら現代短歌賞、同十七年「死と塩」で第四十一回短歌研究賞、同十八年「海雨」で第七回山本健吉文学賞及び第十一回寺山修司短歌賞、同二十五年「燕麦」で第十一回前川佐美雄賞をそれぞれ受賞。そのほかの歌集に『風舟』『西行の肺』。歌書に『いま、社会詠』『風景と実感』『対峙と対話』がある。京都市左京区在住。平成二十七年十月に開催した第六十二回「沼津牧水祭短歌大会」の講師。

第二十六回

中学生短歌コンクール

公私立一九校の内、今年は一四校から一七二首の作品が寄せられたが、幾分減少傾向の見られるのが気掛かりになる。各校の取り組み強化を、よりお願いしたい。

作品の審査結果、特選一〇首、入選四五首を選んだ。選は、須永秀生、青木朝子、高橋公子、曾根耕一が担当した。

特選作品について

迎え火の煙の先に思い出すやさしき祖母の

ありし日の顔 青島 翼(第五中)

迎え火の煙の先という発想が良い、作者の祖母を偲ぶ優しい気分の溢れた作品になった。

くつのひもしつかり結んでいざ試合日頃の

努力がためされる日だ 小野馨大(第一中)

今年の応募作品の特徴は、部活の作品が多くて特選歌もそれに集中した。この作品は、部活動に取組む作者の決意があふれている。靴ひもを結ぶという具体的な表現が良い。

身構える僕に日差しが照りつけてテニス

コートに汗がしたたる 森本大介(大岡中)

前者と同じように、これはテニスコートの作品、活き活きとした作者の試合に賭ける緊張した情景が見えて、力強い作品になった。

「へいいくぞ！」球場に響くコーチの声別

れの瞬間今よみがえる 飯田 均(原中)

「別れの瞬間」というのは、コーチの転任或いは先輩との別れか。思い出の詰まった作品であり、結句でそれを読者に伝える巧い表現になった。

ガンバレといつも応援送りつついつかは出

たいあのピッチへと 田丸朝一(第三中)

「あのピッチ」というのが具体的にないが、野球かサッカーの試合と思いたい。作者の願望が籠った素直な歌になった。試合を見ながら自分の夢を重ねたのが良い。

部活動毎日通い一年半「バスケ」と書いて

「青春」と読む 佐藤崇政(第四中)

自分の青春をバスケットボールにかけた決意、結句の思い切った比喩で決まった作になったが、部活動に通い続けたしんどい気持ちを詠う方法もあつたと思う。

「へいワシユギ」くずれかけてる日本はど

うなつていく世界の中で 鈴木萌里(第三中)

日本の社会に関心をもった作品である。このような作品を皆が歌ってほしい。それは中学生としての視野を広げることになる。

帰り道ガールズトークに盛り上がる知るの

は空と新緑の木々 曾我実咲(第五中)

新しい流行語を使って切れのよいさっぱりとした作品である。

遠いなあ久方に見た夏空のまっすくな青が

私も欲しい 野田星奈(愛鷹中)

大人には、このような作品は詠めない夢があつて、中学生らしさが素直に表現された。結句の願望が良く決まった。

妙心寺どこにいたつてにらまれるいけない

ことはたぶんしてない 山本ゆな(静浦中)

今回は旅行詠が少ないのも特徴だったが、この妙心寺の天上絵と睨めっこは面白い、作者の気持がよく詠われた。

以上 特選歌について触れたが、入選歌も特選にしたい作品も何首あつた。「止まらない親子ゲンカがまた始まる私反抗期母更年期」授業中いつも目がいくかけ時計何回みても進みがおそい「前の席ひらり舞う髪授業中私をさけて吹きぬける風」等である。これらの作品には、中学生らしい物の見方や感じ方、皮肉があつて面白く読めた。

投稿作品の全体については、学校のアンバランスが目立つのは毎回であるが、応募に教師の姿勢が問われることにもなるうか。意欲を望みたい。(曾根耕一)



第62回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式 (平成27年10月18日)

千本松原を愛した牧水を偲んで集う

旅を愛し自然を愛した歌人の若山牧水（二八八五〜一九二八年）は、またこよなく酒を愛した。遺品として残る盃さかずきは意外なほど小さいが、これこそが本当の酒好きの証し。ちびりちびりとやり、一日の量が一升を超えるのはザラ。朝起きると二合ほどの清酒で喉を潤し、自宅近くの松林の中へ散策に出るのが日課であった。

千本松原に歌碑第一号

宮崎県旧東郷町（現日向市）の山間に生まれた牧水の終焉ゆげんの地は、静岡県沼津。東京での煩瑣な暮らしを避け、大正九年（一九二〇）に一二年の静養のつもりで転居する。駿河湾に臨み富士の山を眼前に仰ぐ風光は、牧水をたいそう喜ばせ、いつの間にか五年の月日ついに永住の気持に変わり、景勝地「千本松原」に隣接する土地を購入して、編集室付きの自宅を構えるのである。

その千本松原に建つ歌碑は、全国に三〇〇余あるといわれる牧水歌碑の第一号。刻まれている歌は名高い、

幾山河こえさきりゆかば寂しさのはてなむ
国ぞけふも旅ゆく

この歌碑は、牧水の門弟・鈴木秋灯いわく、牧水が座る姿そっくりの石の歌碑。牧水が亡くなった翌年、秋灯ら弟子たちによって建てられた。爾来しらい、沼津での顕彰の動きは途切れしていない。

牧水を顕彰する会「沼津牧水会」の設立は昭和二九年（一九五四）。設立以来続く催しが、毎年秋に行われる歌碑の前での「沼津牧水祭・碑前祭」である。碑前祭では牧水の歌の合唱や舞踊などのほか、酒を愛した牧水にふさわしく歌碑に清酒を注ぐ。ちなみに、牧水の旅の足跡は全国に及び、各地に歌碑が建ち、顕彰会も存在するが、歌碑への献酒は碑前祭の定番である。

昭和四九年（一九七四）の碑前祭から加わった「芝酒盛」は、その名の通り、芝の上での酒盛りである。沼津牧水会が二斗樽などの清酒を用意し、沼津名物のあじ鯨すしや干物を無料で振る舞う。毎年五〇〇人ほど集まる参加者

は、碑前の芝に敷かれたゴザの上で車座に。沼津の文化や将来のこと、はたまた政治の悪口をつまみに酒を飲む。出し物としては詩吟あり合唱あり太鼓あり。無礼講の酒盛りを牧水に献するのである。

菩提寺の縁で活動四〇年

同じく毎年開催するのが「短歌大会」。第一線の歌人による講演と一般に広く募集した短歌の選が行われる。終わったら酒席となるが、歌人との酒はとにかく楽しい。佐佐木幸綱さんや伊藤一彦さんは酒豪。馬場あき子さんも本当に楽しくお酒を飲まれる方で、「林さんと飲むと楽しい」なんてお世辞も飛び出す。天上の牧水はさぞ喜んでのことだろう。

とはいえ、私自身は歌人ではないし、牧水の歌について語る術は持たない。それでも牧水を敬愛し、四十年にわたって顕彰活動を続けるのは、私が牧水の菩提寺、乗蓮寺の住職であることに関わりがある。

牧水が沼津の地で何よりほれ込んだのが、曲がりくねらず「轟々と」聳そびえる千本松原の景観であった。皇室の御料林だった松原は、大正一五年（一九二六）、静岡県の所有となつたとたん、財政難から一部を伐採する計画が持ち上がる。そこで敢然と立ち上がったのが、

牧水。当時の新聞「時事新報」及び「沼津日日新聞」に伐採反対の檄文を投稿し、演説会で弁舌を振るう。この時、反対運動を共に展開したのが私の祖父、当時の乗蓮寺住職・林彦明である。

自然保護のさきがけとも言えるこの運動は盛り上がり、計画は中止に。古く潮風から人や農作物を守った松原は

沼津の宝。宝を守つてくれた恩人の顕彰は、住職である私の務めだと考えている。

酒盛りから記念館構想

昭和六二年（一九八七）、千本松原の地に開館した沼津市若山牧水記念館は、遺墨や遺品など数千点を収蔵。牧水にゆかりのある短歌や俳句、書道の講座のほか、音楽コンサートを開くなど文化の拠点となつていく。この記念館の設立も、実は芝酒盛がきっかけ。車座での、遺墨などを収める施設が

あればいいねという話から始まり、市への建設誓願運動へと展開。仲間たちと寄付金集めに走り、沼津ゆかりの作家、芹沢光治良や井上靖に競売用の色紙を書いてもらう、ということもした。支援の手は、数限りなかった。牧水は人間が大好きだった。そして人間のよい面を見いだそうとした。牧水にほれ込み

顕彰に関わる人々たちを見て、そう思うようになった。いなくなつても人を結び、楽しい酒を促す。そんな歌人はめつたにいないだろう。* 日本経済新聞の「文化欄」に掲載された拙稿を転載させていただきました。

林 茂樹
沼津牧水会理事長

文化

牧水の終焉の地は、静岡、沼津での顕彰の動きは余り切れていない。津牧水会が主催する「沼津牧水会」の設立は54年（昭和29年）設立以来、酒を愛した牧水に「沼津」の山を眼前に仰ぐ風光は、牧水をたいそう喜ばせ、いつの間にか5年の月日、ついに水柱の気持に変わり、景勝地千本松原に、編集付きの自宅を構えるのであつた。その千本松原に立つ歌碑は、全国に300余あるといわれる牧水歌碑の第1号。刻まれている歌は名高い、地山河（えびの）は、寂しきのはなは国ぞけいも旅ゆく、弟、鈴木灯杖いわ、水が流るる姿そがりの石の歌碑。牧水が亡くなった翌年、秋灯ら弟子たちによって建てられた。終焉の地、静岡、沼津での顕彰の動きは余り切れていない。津牧水会が主催する「沼津牧水会」の設立は54年（昭和29年）設立以来、酒を愛した牧水に「沼津」の山を眼前に仰ぐ風光は、牧水をたいそう喜ばせ、いつの間にか5年の月日、ついに水柱の気持に変わり、景勝地千本松原に、編集付きの自宅を構えるのであつた。その千本松原に立つ歌碑は、全国に300余あるといわれる牧水歌碑の第1号。刻まれている歌は名高い、地山河（えびの）は、寂しきのはなは国ぞけいも旅ゆく、弟、鈴木灯杖いわ、水が流るる姿そがりの石の歌碑。牧水が亡くなった翌年、秋灯ら弟子たちによって建てられた。

牧水に捧ぐ杯の輪

終焉の地、静岡、沼津での顕彰の要 文化発信の舞台に



駅前祭では献酒のほか合唱などを催す

ぐ。ちなみに、牧水の旅の足跡は全国に散らばり、各地に歌碑が建てられ、顕彰の存在するが、歌碑への文化や将来のことは、74年の顕彰活動では、詩吟あり、出物あり、酒あり、無礼講の酒盛り、芝の上の酒盛りである。沼津牧水会が二斗樽、同じく毎年開催するの



林 茂樹

が「短歌大会」。第二線年、静岡県の所有となつた友人、出歌集から文化の拠点となつていく。一部を伐採する計画が持ち上がる。そこで、牧水に捧ぐ杯の輪が、歌との酒盛りとなる。佐々木幸綱さんや伊藤彦一さん、馬場あき子さんも本当に楽しんでお酒を飲む。林さん、共々展開したのが私の祖父、当時の乗蓮寺住職・林彦明である。自然保護のさきがけとも言えるこの運動は盛り上がり、計画は中止に。古く潮風から人や農作物を守った松原は、住職である私の務めだと考えている。酒盛りから記念館構想、沼津市若山牧水会が、遺墨や遺品など数千点を収蔵。牧水にゆかりのある短歌や俳句、書道の講座のほか、音楽コンサートを開くなど文化の拠点となつていく。この記念館の設立も、実は芝酒盛がきっかけ。車座での、遺墨などを収める施設が

第二十回若山牧水賞に 内藤明氏の歌集『虚空の橋』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十回若山牧水賞に内藤明氏の歌集『虚空の橋』(短歌研究社)が選ばれた。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、馬場あき子、伊藤一彦の四氏である。

授賞式は、平成二十八年二月八日(月)宮崎観光ホテルで行われ、若山牧水賞第二十回記念シンポジウムとして、選考委員四名がパネリストになり、「牧水の歌と風土」が催された。翌九日(火)、内藤明氏による「牧水と古代・牧水と現代」の記念講演が延岡市の「カルチャープラザのべおか」で催された。

内藤明氏は昭和二十九年東京都大田区生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。同大学院博士後期課程退学。早稲田大学教授。在学中に歌誌「まひる野」に参加して、作歌活動を開始。同

五十七年武川忠一の歌誌「音」に参加、現在発行人。歌集『斧と勾玉』で芸術選奨文部科学大臣新人賞と寺山修司短歌賞を受賞。歌集『虚空の橋』収録の作品「ブリッジ」で短歌研究賞を受賞。歌集『虚空の橋』で佐藤佐太郎短歌賞を受賞。その他の歌集に『壺中の空』『海境の雲』『夾竹桃と葱坊主』、著書に『うたの生成・歌のゆくえ 日本文学の基層を探る』等がある。宮中歌会始の選者。

内藤氏は受賞に際し、「母校の先輩で、若い時から愛唱してきた若山牧水の賞を受賞し、感激している。年齢を重ね、牧水が持っていた自然への思いや人間との関わりを感じた作品にことさら引き込まれるようになってきた。現代にこそ大切なその思いを、歌に作る中で、もう一度発見していきたい」と話している。

選考委員の各氏は、以下のように評している。佐佐木幸綱氏は、「人生の深みや人との関係にある明るさと暗さの両面が浮かぶ歌集だ」。高野公彦氏は、「日常生活が丁寧に詠まれ、作者の実際の姿がよくわかる。さりげなく、大きな問題を抱え込んだり、日常の外に目を向けた歌もあり、読者をつかむ力を持っている」。馬場あき子氏は、「普通の中に普通

じやないものを見ようとする。日常に遭遇する事柄が、実は異常だったのでは、と考える視点を持つている」。伊藤一彦氏は、「師や両親の死を胸に置きながら詠まれた歌集。日常のデイテールに目をやりながら、心は遠くへ行こうとしているようで面白い」。

自選十五首のうち、十首を紹介する。

尖りたる水を指で沈めをりオモテニデロ
といふ奴もなく

そのこゑの身のうち深く遺れるを鎮めて
ひとり蕎麦を噉れり

木の椅子となりて芝生にひねもすを黙し
てあらば樂しかるべし

人類の地に在る時間短かきを今年のみ
ちの遅きを言へり

右腕がよちれて内にもぐりたる黒きコ
トが吊されてあり

わたつみの鷗を見むと東京の地底遙かに
運ばれてゆく

生きてきたのだらうか
銃弾を浴びたる兵は讚美歌を口ずさみつ

つ水欲りしとふ
父たちの戦後をときに蔑し来て何も持た

ざるわれらとなりぬ
裸足にて海界越ゆる橋あらば日の暮れ方

を渡りゆかむを